

図書館だより

埼玉県立図書館

21号

渋沢 栄一

明治の財界を代表する渋沢栄一（一八四〇―一九三二）は、榛沢郡血洗島（深谷市）に生まれた。その旧宅が昨年十月一日、国際人としての栄一にふさわしく「渋沢国際会館」として開館、あわせて

銅像の除幕式も行われ、チョンマゲ姿の若き栄一が誕生した。

生家は藍玉を商う豪農であった。青年栄一は、討幕の志を抱きつつも縁あって一橋家に仕官した。像はその頃の凛々しい姿である。このときすでに彼の心は、はるかなヨーロッパに向けられていた。（S）



20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

愛敬座右七書

大澤 俊吉

十萬種、或いは十五萬種といわれる日本人の苗字程、不思議なものはない。その中でも、苗字多様化の原動力となったのが、武蔵七党の存在であると指摘したのは柳田国男先生であった。学生時代にそんな話を聞いたのが、頭の隅に四十年もこびりついていて、秩父地方の苗字に関心を持ち始めて、その調査に手をつけて十数年になる。そして漸く、一つの報告書として『埼玉の苗字』（さきたま出版会）を出版することが出来た。

そして更に群馬県、栃木県と悉皆調査を進めて、『北関東の苗字』として、三県比較によって初めて苗字の分布についての報告書が出来上がるわけである。想えば五ヶ年間、老婆と共に、明けても暮れてもカードの記入をしつづけ、八万枚のカードに、三県二一市町村の記入をもう少しで終了するわけである。

労多くして報いのない、こんな調査を始めてしまったと思うが、今まで誰も手をつけなかったのは資料と

なるものがないのと、大変な労力を要するからであった。今では三県の悉皆調査という難行をよくこそやり遂げたという自慰にひたっている。

三県で四万種の苗字の存在地と数をカードですぐに引き出せるわけで、目下その整理、構成に苦慮している。十月頃までには完成したいと日夜努力を続けている。

その中に『愛敬』さんという方が埼玉に六、群馬に十二家ある。中之条六、吾妻二、長野原二、渋川二であるから、発祥はその地方であろう。それなので『愛敬座右の書』を七書あげて、毎日毎日、座右の書として、それこそ『韋編三絶』種で、スリヨンテープで万身創痕の補修だらけの本を手にとると、これらの膨大な書を独力で書かれた著者に絶大な『愛敬』を捧げずにはいられないのである。

第一にあげるのが、吉田東吾先生の『大日本地名辞典』全七巻である。初版は明治三十五年前後であるから先生は未だ四十歳にならない時であ

るから、驚異の書といわざるを得ない。私が求めたのは早大の文学部に入学した記念として七冊一度に求めたと記憶する。昭和十七年のことである。一冊六十五円とあるから、七巻四五五円の大金であった。昭和十七年の物価について、岩崎爾郎『物価の世相一〇〇年』によると、大工標準日当二円五〇銭、天ぷら定食銀座で二円五〇銭、清酒一級三円一八銭、ビール五七銭、東京大阪間の汽車賃が高くなって八円五銭と出ている。昭和十七年の六十五円は、昔の中学の先生の初任給位ではなかったろうか。

それから五十年間、特に郷土史を手がけたこの二十年間『坂東篇』など赤線だらけ、補修のテープ張りで元の表紙の顔がない位である。

次は大田亮先生の『姓氏家系大辞典』。初版は大正末期だったらしいが、私は戦争中の版で、十巻位の様子が、角川書店で昭和三十八年、三巻もので出版されたので、今はそれを用いている。驚くべきことは六六七三頁であるから、九五二万語、四百字詰で二三、七七三校となる大著である。しかも、やはり三十五、六歳の執筆となる。

次は柳田国男先生の『定本 柳田

国男集』三六巻である。幸に索引があるので、必要なものを各巻から出し、全部コピーして、ゆっくりと赤線を引ながら読むことにしている。私は執筆する時には、あらゆる本から必要な点をコピーして、そこをゆっくり読んで赤線を引くのであるが、初めの頃はコピーが勿体ないのでコピーをとっておいたが、あまりにも非能率だったので、近頃は思いきって捨ててしまうことにした。だから、柳田集は幾百枚コピーしたかわからない。

第四書は日本ユニバックス社『日本の苗字』二巻である。十一万余の苗字を収集したものである。三ヶ年かかって収集し、コンピュータに入力したものである。これと、佐久間英、丹羽基三、豊田武三の三先生の著書がなかったら、私は苗字の調査に手を出さなかったし、出来なかったろう。

第五書めは、石井研堂先生『明治事物起源』である。これも二巻千五百頁の大著である。昭和十九年十二月、上巻売価（税込）十四円三十銭、下巻税込十七円五十銭とある。一割の特別行為税というものが定価に加算されている珍らしいものである。これは戦争中の本なので、紙も製本

県内図書館めぐり

坂戸市立中央図書館

昭和四十九年以来、図書館サービスを重ねた市立図書館が本年、折しも十年前と同じ七月一日（日）に、生まれ変わった。

切妻造りを型取りした屋根を仰ぎ、小径を思わせる玄関までの植え込みを通ると、自然採光で吹きぬけのホールへ出る。

BGMが流れるホールの中央に立つと、前後の頂上に「学」という題のレリーフが飾られている。

シンボリックなこのホールを「エントランス・ホール」、玄関までを「エントランス・アプローチ」と呼んでいる。

「個人の尊重」を精神とし、市民の向上を第一に掲げ、現在、更に中央館から遠くても受けられるサービス体制をと、五十七年度の移動図書館運行開始に続き、分館構想にも着手している。

概要

○施設 鉄筋コンクリート三階
延床面積 二、七〇七㎡



所在地 坂戸市仲町1番23号
TEL 〇四九二一八一六三六九

一階：貸出室（一般開架・児童コーナー・試験コーナー・ブラウジングコーナー）対面朗読室
二階：参考調査室、郷土（大川平三郎）資料展示室、視聴覚室、会議室、学習室
三階：書庫
○移動図書館 一台
○所蔵資料 一般書五〇、〇〇〇冊、児童書三〇、〇〇〇冊、参考調査資料一〇、〇〇〇冊、新聞一〇紙、雑誌二〇〇誌、レコード一、〇〇〇枚、カセット八〇〇本

もひどく、今はひろげること困難な程である。幸にも昭和四十四年『明治文化全集』別巻として再々版されたので、今はそれを用いている。初版は明治四十年に出版されたという。これまた、先生四十歳頃の著作ということになる。

私は学生時代この本を手にした時、私もいつかこんな本を書きたいと強く思った。比較にもならないが、三百頁の本で『行田ことはじめ事典』（国書刊行会）を書くことが出来た。若い時の印象というものは消え失せないものだとしみじみ思う。

第六集は物集高見、高量親子二代で書き上げた『広文庫』二十巻である。初版は大正五年に出され、行田の女子高校（忍高女）の図書館にあった。貴族院議員で戦死をされた松岡秀夫氏が寄贈されたものであった。誰も手にした人がないらしく、塵がつもっていたのをよくお借りしたものである。熊中の恩師であった山岸諒三先生が校長だったので、よくお話をしたもので、この書を手にする

と山岸先生を思い出す。
昭和五十六年三月、友人達が「著作二十八冊を祝う会」を盛大にしてくれ、その時の記念として、この『広文庫』二十巻と『群書索引』二巻を

元関東短期大学教授
関東学園大学経済文化研究所員



埼玉の文学 埼玉の詩人たち

岡本 潤

埼玉の生んだ近代詩人で、太田玉潤は本名保太郎。明治三十四年七月五日、埼玉県児玉郡本庄町（現・本庄市）に生まれる。五歳のころ父と離別した母に連れられ、京都市伏見の母方の祖父の家に移る。

橋にて

おさない日。／わたしは母とい
つしよに父の家を去った。／東
のくから知らない西のくにへ、
汽車にのって行った。／汽車は
郷土の山河をとおぎけ／風物は
煙とともにうしろへながれて行
った。／汽車がごうごうと音を
たて／鉄橋にかかると／わたし
は胸をおどらし／眼をみはった。

（人間「昭和二十二年四月号」）
母は大阪へ嫁ぎに出て、祖父母の
もとで育てられる。明治四十一年深
里小学校入学。小学五年の春、突然
祖父に連れられて本庄の土を踏む。
知らぬ間に手続きがとられ本庄の小

学校に転校する。一人も友達ができず、
六年になると間もなく京都深里の小
学校にまいもどる。本庄一年ほどの
間、「ひとり」で、どこかというあてもな
く歩きまわっていた。桑畑のひろが
る単調な野っぱらや、町はずれの鎮
守の境内や、安養寺という寺の裏に
つくく林の中などを、なんというこ
となくぶらついて時間をつぶした。
世間とはかわりのない、ひとりだ
けの時間だった。人けのない林の木
の幹に、ナイフで女の顔を彫り、そ
の下に片仮名で、ユキと刻みこんだ
りした。ユキは母の名だ。遠く離れ
ている母を、やはり「恋人」のよう
に慕っていたのだろう。（自伝「詩
人の運命」）潤は離群癖と反抗癖の
強い少年となる。

大正九年、京都平安中学を卒業。
土京して中央大学や東洋大学に籍を
おくが中退する。クロボトキン、大
杉栄らの著書を通してアナキズムの
思想に近づき、アナキストの研究會
北風会に入会し、実践的な反強権
思想を身につける。日本社会主義同
盟結成に参加。前衛芸術派の詩運動

に共鳴し詩作をこころみ、佐野袈裟
美らの「シムーン」（十一年創刊・
改題「熱風」）に作品を発表する。
十二年、萩原恭次郎、壺井繁治、川
崎長太郎と「赤と黒」を創刊。「詩と
は爆弾である！」という宣言を出し、
既成詩壇に反逆しアナキスト詩人と
しての詩の革命をめざす。同年、恭
次郎、繁治、高橋新吉らと「ダムダ
ム」を創刊。昭和二年、アナキズム
系の文学者、詩人を結集した「文学
解放」の発刊に参加。三年一月に第
一詩集「夜から朝へ」を刊行する。
五年、小野十三郎らと「弾道」を創
刊。七年、秋山清らと「解放文化」
を発刊。八年二月、解放文化叢書の
第一輯として第二詩集「罰当りは生
きてゐる」を刊行するが、発行直後
に発禁となる。十年、菊岡久利と「反
対」創刊。十五年、「文化組織」を創
刊。十六年十二月に第三詩集「夜の
機関車」を刊行する。

戦後、二十一年に秋山清、金子光
晴、小野十三郎らと「コスモス」創
刊。新日本文学会会員となり民主主
義文学運動に参加。思想的にもアナ
キズムからコムニズムへ転換、日
本共産党に入党。のち除名される。
二十二年一月に第四詩集「檻の旗」
を刊行する。その後、詩集に「岡本

潤詩集（二十九年九月）「橋」（三十
年五月）「笑う死者」（四十二年八月）
自伝に「罰当りは生きてゐる」（四十
年十一月）「詩人の運命」などがある。
昭和五十二年二月十六日、七十六歳
で死亡する。

潤にとって「本庄」とは、父の死
後岡本家の後を継ぎ本庄に住むべし
と言う本家や親戚に対し、きっぱり
と縁を切り東京に去った「いまいま
しい町」であったのである。

いまいましい町
偶然おれが生まれたというだけ
の／いまいましい町だ
いまいましい偶然がおれを生ん
だところ／これだおれが捨てさ
った家は／門もない板塀もない
荒れほうだいは破れ瓦は落ち
朽ちるにまかせた廃屋だ／とつ
くに死に絶えたがゆき場のない
おやじやおふくろの魂魄が／コ
ウモリのようにぶらさがる化物
屋敷／などと幻想するおれは
なんだ

地平のはてで／落ちるのをため
らっている夕陽／もう一度エイ
ッとはかり／そいつを蹴つとば
せ！（「新日本文学」昭和三十五
年一月号）
（日本ペンクラブ会員 榎本 了）

東西南北

◎第六回

「本を読む県民のつどい」

県民の皆様が、本に親しみ、図書
館活動に対する理解を深めていた
くよう「本を読む県民のつどい」を
開きます。

多数の皆様参加をお待ちしてい
ます。

日時 11月16日(金) 13時～15時
40分

会場 春日部市民文化会館

TEL 〇四八七六五八一一
内容 〇読書グループ及び地域・
家庭文庫の表彰

〇読書グループ及び地域・
家庭文庫の活動事例発表

〇記念講演

講師 早乙女貢氏
演題 「歴史の転換期の
女性たち」

※申込み ハガキに会場名・住所・
氏名・電話番号を明記のうえ、

11月10日(土)(消印有効)までに、
県立久喜図書館(千三六四 久

喜市下早見85)へお申込みくだ
さい。

◎県立図書館

特別休館のお知らせ

〇秋季特別整理のため、次の期間、
休館となります。

熊谷図書館

9月26日(水)～10月5日(金)

川越・久喜図書館

10月15日(月)～10月24日(水)

〇施設改修及び秋季特別整理のため
次の期間、休館となります。

浦和図書館

9月18日(火)～10月8日(月)

ただし、いずれも移動図書館、一
般事務は行っています。

10月11日(木) 11月11日(木)
主な催し物

■県立浦和図書館

●特別資料展示会

期間 11月9日(金)～11月15日(水)

内容 「さいたまの伝統産業」

●県民の日名作映画会

日時 11月10日(土) 14時～

内容 「キューボラのある街」

●県民の日映画会

日時 11月13日(火) 14時～

内容 「竹縄のさと」・「秩父のほ
ぐし捺染」・「手一伝説を創
る」

日時 11月14日(水) 14時～
内容 「老杉は語る―西川材のふる
さと」・「細川紙の美を渡く」
・「川口の鍾物師」

■県立熊谷図書館

●郷土を知る文化資料展―荒川―

期間 11月4日(月)～11月18日(日)

内容 荒川についての資料展示
映画「荒川」等の上映

●名作映画鑑賞会

日時 10月6日(土) 13時30分～

会場 皆野町総合センター

内容 「親たちのスクラム」・「遙か
なる山の呼び声」

日時 11月10日(土) 10時～14時
内容 「黄色いリボン」

■県立川越図書館

●埼玉の雑誌展

期間 11月13日(火)～11月18日(日)

内容 埼玉県内刊行及び埼玉県関係
の雑誌展示

●映画と音楽の集い―野村芳太郎
監督作品映画会

〇第一回 11月10日(土) 13時30分～

内容 「張込み」

〇第二回 11月17日(土) 13時30分～

内容 「事件」

〇第三回 11月24日(土) 13時30分～

内容 「鬼畜」

●移動図書館利用者のつどい

日時 10月16日(火) 13時～15時

会場 都幾川村中央公民館

内容 講演 講師・金子兜太氏
題・「旅と俳諧」 先着順

■県立久喜図書館

●著者を囲む会
日時 10月25日(水) 13時30分～15時
30分

会場 加須市市民福祉会館
講師 阿川弘之氏

演題 「日本の笑い」

※申込み ハガキに会場名・住所・
氏名・電話番号を明記のうえ、10
月8日(月)(消印有効)までに、県
立久喜図書館(千三六五 久喜市
下早見85)へ申込みください。定
員を超えた場合のみ御返事を差し
上げます。

●郷土資料展

期間 11月13日(火)～11月18日(日)

内容 埼玉・北埼玉地区の25市町村内
で発行された雑誌及び郷土人
により著作された資料を展示。

会場が無記入は、いずれも主催館
■印が会場。詳細は県立各館まで

読書グループの紹介

古典読書会

私達は古典の好きな二十数名のグループです。

大宮市立図書館を借りて、毎月三回古典を全員で朗読し、訳し、話し合いながら楽しんで居る間に、十数年がたつてしまったというのが私達の読書会の成り立ちかと思ひます。

五十五年夏頃までは、故関戸勲師を中心に、その後はラジオのテープを利用したり、また、各人が出来る範囲で調べ、力を合わせて今迄に「かげろふ日記」、平家物語、万葉集、雨月物語、古今集、新古今集、枕草子、伊勢物語等、そして今は紫式部日記と十数年かけて読み通した源氏物語の五十四帖を再び読みたくて、「何れの御時にか」より始めて空蟬に掛ろうとしております。はじめはとまどつた古語や倫理観にもとまどつたか、当時の女性の生き様に現代を照応させて湧く想ひはさまざまでも、古典にすつかり捕われてしまった私達です。何かのすみに話題が、身近かな事に広がることもあり、これも楽し



定例読書会

いひとときです。そして、長恨歌をプリントして全員が持つておりますので、関わりのある処では声を揃えて朗読もします。

また、時には文学散歩や山野草を見に行ったりもします。歌枕を訪ねたり、神社仏閣に詣うでて神話にまで思いをはせます。

子育ての終わった今、男性より少し長生きで、とり遣される羽目になり勝ちな女の身にとつて、この集いはこよなく素晴らしい心づきであり、生命ある限り続けましようとしており合つております。

アンケートには読みたい古典が、その証しのようにあれこれ書き出されます。

学問的なむづかしい事は置いて、市井の主婦が読み込める範囲であつても、古典を原典で楽しく読むといふことをモットーにして、ながくながつ読み続けたいと、全員が常に思つておりますし、また、さうなるものと信じております。

(多々良 寛子)

松の木読書会

朝霞市読書グループ

町なかにはめづらしい雑木を交えた松林の中の図書館、こじんまりとした白い建物に、私たちは、長い間親しみ集まつて居る。松の木読書会の生まれたのは、昭和四十六年六月のことであるから、もう十三年になる。時に会員の移り変わりや増減はあつたが、初めからの会員も数人、読んだ本は百三十冊を越える。あれこれ興味ありそうなものを選んだり、二葉亭四迷・蘆花・独歩から、一葉・藤村・漱石と、近代文学を順次追つてもみた。去る七月は芹沢光治良の「愛と死の書」を読んだ。戦中の上流階級には、こういう家庭もあつたのだらうか「女の語り口にしたのは、適当だらうか、女が独りで戦地へ行く……不自然さが多い」夫と妾、その娘たちの中で……すべてのことに耐えて死んでいった母親の生き方に感心した」と言う男の会員に、反発の声も二・三。何でも言い合つて同感し、反論し、終つて楽しかつた十時から十二時までの時間では、少し足りないと思つときもある。年を重ね、



一遠山美術館にて一

ひとり、ひとりの読みが深まつていくことを感じる。毎度司会と書記を決めるだけで、あまり無理をせず楽しくしているけれど、漫然と作品を読むだけでなく、何か目標をもつて、系統づけるべきではないか。そしてしっかりと記録もまともにあるものにならなければと思うけれど、力及ばずということである。春秋の遠足、映画や絵画の鑑賞、旅行なども楽しみにしている。これまで続けてこられたのも、図書館の係りの方に力強くささえになつてもらったこと。加えて、市の並木教育長は、大変幅広い読書家で、度々面白く講義をしてくださる。今まで「梁塵秘抄」「枕草子」「雨月物語」などなど、町の古典クラブの皆さんにも呼びかけ、お話を聞き、一諸に声を揃えて朗読し、時のたつのを忘れる、まことに楽しい一時をもつのである。

(長崎 チヨ)



科学者の著作 ——物理学者2——

今回の「本のひろば」は、図書館だより第17号(昭和58年9月25日号)で取り上げた「科学者の著作—物理学者—」の続編をお届けします。

前回は三名のノーベル物理学賞受賞者を含む、日本の著名な物理学者五人(江崎玲於奈、寺田寅彦、朝永振一郎、長岡半太郎、湯川秀樹)の著作を紹介しましたが、今回は海外に目を向けてみました。

一口に物理学者と言ってもその数は膨大なものです。そこで取り上げるに際しては、二十世紀の傑出した物理学者であつて、しかもその著作が多く日本語に翻訳されている人に限ることにしました。御了承ください。ちなみに、五人ともノーベル物理学賞を受賞しています。

なお前回同様、県立四館にはありませんが、国立国会図書館で所蔵している本も挙げてあります。参考にしてください。

- (記載の内容は、以下の順になつています。)
- 書名(巻数) 訳者 出版者
- (シリーズ名) 出版年(所蔵館)
- A・アインシュタイン
- アインシュタイン全集(全3巻)
- 井上健ほか訳 共立出版 昭45-47
- (浦・川・久)
- アインシュタイン・ゾンマーフェルト往復書簡 A・ヘルマン編 小林辰作、坂口治隆訳 法政大学出版局(叢書・ウニベルシタス) 昭46
- (浦・熊・川)
- アインシュタイン平和書簡(全3巻)
- O・ネーサン、H・ノーデン編 金子敏男訳 みすず書房 昭49-52
- (浦・川・久)
- アインシュタイン・ボルン往復書簡集 西義之ほか訳 三修社 昭51
- (浦・川・久)
- アインシュタイン全集(全4巻) 石原純ほか訳 改造社 大11-12
- (国図)
- 自伝ノート 中村誠太郎、五十嵐正敬訳 東京図書 昭53 (熊・川)
- 相対論の意味 矢野健太郎訳 岩波書店 昭33 (熊)
- 晩年に想ふ 中村誠太郎ほか訳 日本評論社 昭25 (浦)
- 晩年に想う 中村誠太郎ほか訳 講

- 談社(講談社文庫) 昭46 (浦・熊・川・久)
- 物理学はいかに創られたか(上・下) L・インフェルト共著 石原純訳 岩波書店(岩波新書) 昭14-15
- (熊・川・久)
- わが世界観 石井友幸、稲葉明男訳 白揚社 昭22 (国図)
- わが相対性理論 金子務訳 白揚社 昭48 (久)
- E・シュレーディンガー 科学とヒューマニズム 伏見康治ほか訳 みすず書房(現代科学叢書) 昭31 (国図)
- シュレーディンガー選集(全2巻) 田中正ほか訳 共立出版 昭49 (熊)
- 生命とは何か 岡小天、鎮目恭夫訳 岩波書店(岩波新書) 昭26 (熊・川・久)
- W・K・ハイゼンベルク 科学における伝統 山崎和夫訳 みすず書房 昭53 (浦・川・久)
- 限界を越えて 尾崎辰之助訳 蒼樹書房 昭48 (国図)
- 原子核の物理 佐々木家雄訳 みすず書房(現代科学叢書) 昭32 (国図)
- 現代物理学の自然像 尾崎辰之助訳 みすず書房 昭40 (国図)

- 現代物理学の思想 河野伊三郎、富山小太郎訳 みすず書房 昭42 (川)
- 自然科学的世界像 田村松平訳 みすず書房(現代科学叢書) 昭28 (国図)
- 自然科学的世界像 田村松平訳 第2版 みすず書房 昭54 (川)
- 素粒子の統一場理論 片山泰久訳 みすず書房 昭45 (国図)
- 地上と星の中のエネルギー 清水詔光訳 海鳴社 昭50 (川)
- 部分と全体 山崎和夫訳 みすず書房 昭49 (川・久)
- 量子論の物理的基礎 玉本英彦ほか訳 みすず書房 昭29 (熊)
- M・K・E・L・プランク 現代物理学の思想(上・下) 田中加夫ほか訳 法律文化社 昭46-48 (国図)
- 熱輻射論 西尾成子訳 東海大学出版会(物理学の古典7) 昭50 (久)
- 物理学と世界観 新井慶訳 育生社 昭21 (国図)
- プランク理論物理学汎論(全5巻) 寺沢寛一監訳 生産技術センター新社 昭52 (国図)
- M・ボルン アインシュタインの相対性原理 瀬

谷正男訳 講談社 昭46 (浦・熊)
 アインシュタインの相対性理論 林
 一訳 東京図書 昭43 (浦・熊・
 川・久)
 原子力学の諸問題 岩本文明訳 三
 省堂 昭48 (国図)
 現代物理学 鈴木良治、金関義則訳
 みず書房 昭39 (熊)
 光学の原理(全3巻) E・ウォル
 フ共著 草川徹、横田英嗣訳 東海
 大学出版会 昭49、50 (浦・川)
 物理学の変革をめぐって 三木忠夫
 訳 東京図書 昭48 (久)
 私の物理学と主張 若松征男訳 東

京図書 昭48 (国図)
 これをもつて「物理学者編」を終わ
 りますが、以下に、参考までに、この
 二回で取り上げた物理学者たちの伝
 記を紹介いたします。伝記がたぐさん刊
 行されている人については、主なもの
 の一、二点に止めてあります。また、
 一般的伝記が見当たらない人につ
 いては、ここに紹介することができ
 ませんでした。お断りしておきます。
 御利用をお待ちしています。
 アインシュタイン伝 矢野健太郎著
 新潮社(新潮選書) 昭43 (浦・久)

アインシュタインの生涯 C・ゼー
 リツヒ著 広重徹訳 東京図書 昭
 49 (浦・熊・川・久)
 科学者寺田寅彦 宇田道隆編著 日
 本放送出版協会 昭50 (浦・熊・久)
 寺田寅彦の生涯 小林雅司著 東京
 図書 昭52 (浦・久)
 回想の朝永振一郎 松井卷之助編
 みず書房 昭55 (浦・熊・久)
 追想朝永振一郎 伊藤大介編著 中
 央公論社(自然選書) 昭51 (川・久)
 長岡半太郎 板倉聖宣著 朝日新聞
 社(朝日評伝選10) 昭51 (浦・
 川・久)

長岡半太郎伝 板倉聖宣ほか著 昭
 48 (久)
 ハイゼンベルクの思想と生涯 A・
 ヘルマン著 山崎和夫、内藤道雄訳
 講談社 昭52 (浦・熊・川・久)
 ハイゼンベルクの世界 H・キュニ
 ー著 遠藤真二訳 東京図書 昭51
 (川・久)
 嵐の中の科学者—プランクとアイン
 シュタイン—菅井準一著 日本評
 論社(新文化叢書) 昭24 (浦)
 プランクの生涯 A・ヘルマン著
 林憲二、生井沢寛訳 東京図書 昭
 52 (国図)

おたすねください

問 日本の蔵書印について知り
 たい。
 答 蔵書印とは、書籍の所有を
 明らかにするため、所蔵の本に押
 捺する印章をいう。蔵書票が、ヨ
 ーロッパにおいて、盛んに行われ
 たのに対し、蔵書印は東洋に発達
 した。
 印材には、玉、石、銅、金、銀
 などの金属、象牙、竹、木などが
 用いられたが、その形態、印文書
 体もまた多種多様で所有者の個性
 が表われているのも興味深い。
 特に注目すべきことは、蔵書印
 が書籍の伝来を知るうえに、また

価値を判定するうえに、重要な資
 料となる場合が少なくないことで
 ある。
 日本の蔵書印では、光明皇后の
 「積善藤家」「内家私印」や、「東
 大寺印」「西大寺印」などが最も古
 い例で「野之国学」「足利学校」「金
 沢文庫」などがある。
 特に横浜市の金沢称名寺の「金
 沢文庫」という長方形の印が著名
 である。
 蔵書印はだいたい蔵書家の姓か
 雅号か姓名又は、文庫名を入れた
 ものが多いが、ときには書物に対
 する希望や警句などを入れたもの

もある。
 紀州藩士、長沢伴雄の(我死ナ
 ハウリテ、黄金ニカヘナ、ム、オ
 ヤノ物トテ虫ニハマスナ。長沢伴
 雄蔵書記)、伴信友の(コノフミカ
 リテミムヒトアラムニハ、ヨミハ
 テ、トクカヘシタマヘヤ若狭酒井
 家々人 伴氏蔵本)などはよく知
 られている。
 参考文献
 小野則秋著「日本の蔵書印」
 平凡社「世界大百科事典」
 日置昌一著「話の大事典」
 庄司浅水「蔵書票」

編集後記

例年になく猛暑でした。図書館は
 連日満席でした。
 この二十一号が、お手元に届く頃
 は、きびしかった残暑も終りを告げる
 ころですが、健康には十分御注意を。
 さて、いよいよ灯火親しむの候、
 読書の秋となります。大澤俊吉先生
 の玉稿「愛敬座七書」いかがでし
 ょうか。皆さんも座右の書をお持ち
 のことと存じますが、一冊一冊を大
 切にしてください。
 (訂正)
 二十号「おたすねください」※3
 「岩波書店」は「岩崎書店」の誤り
 につきお詫びして訂正します。